

「アイヌ神謡集」 エスペラント版付録

北海道エスペラント連盟

2003年

2020年改訂

はじめに

エスペラント（語）とは？

エスペラント（語）とは、ポーランドのザメンホフという人が、1887年に発表した人工の国際共通語のことです。

その当時、ポーランドはロシア領で、ザメンホフが住んでいた小都市ビアウイストクには、リトアニア人、ポーランド人、ロシア人、ドイツ人、ユダヤ人などが混じりあって住んでいて、言葉が通じないためにおきる争いが絶えませんでした。またユダヤ人であった彼は、流浪の民として、いわれなき偏見や多くの差別に苦しんできました。

このようなこともあり、彼は、当時のヨーロッパにあって言語の違いなどでますますひどくなる民族対立をみて、どの民族にも平等になるように、特定の民族のことばではなく、誰にもやさしく学べてしかも豊かな表現が可能な国際共通語が、民族や国家間の平和と文化の発展のために必要だと考えました。

このエスペラントの最大の特徴は、完全に規則的な文法規則にあります。これによって、外国語学習に伴なう苦労・労力が最小限におさえられ、また他の外国語に比べて簡単に習得ができ、世界中の人々が簡単にお互いのコミュニケーションをとることが可能となります。

100年以上前から現在においても、世界各地でエスペランチスト（エスペラントの使用者）が活動しています。また、世界各地にエスペラント組織があり、世界大会などが開催されています。世界組織としては、世界エスペラント協会（UEA）などがあります。日本の組織としては、（財）日本エスペラント学会（JEI）や関西エスペラント連盟（KLEG）などがあります。

エスペラントは、百数十カ国、約百万人の人が話していると言われていています。100年以上の歴史を持ち、様々な人工の国際共通語案の中で唯一成功した言語です。

エスペラントが発表された後、二度の世界大戦で弾圧、打撃をうけながらも、エスペラント運動は発展してきました。発表から一世紀以上を経て、百数十カ国、全世界で約百万人の人々がエスペラントを用いて旅行や文通を楽しんでいます。また年間数百点にのぼるエスペラント図書が出版され、定期刊行物も数十を数えます。

こうした活動は、国連のユネスコでも評価され、「国際語エスペラントを通じて、世界の人々の中の国際的知的交流および相互理解の分野で達成された結果、各国民の友好のために達した成果は、ユネスコの目的と理想に一致する」

というように、1954年と1985年のユネスコ総会でエスペラントに関する決議が採択されています。そして世界エスペラント協会は、ユネスコと協力して活動しています。

毎年一度行われる世界エスペラント大会には、世界中から数千人もの人々が集まり、エスペラントで、さまざまなテーマについての話し合いをしています。

1996年のチェコ共和国プラハで行われた世界大会では、「言語上の権利」や「言語の多様性」など、平等で民主的な国際的コミュニケーションの発展のために必要な原則について、現代社会におけるエスペランティストの立場を明らかにするための宣言がなされました。これをプラハ宣言と称しますが、エスペラントへの理解を深めるために、機会があれば是非ご覧ください。

<http://www.hokkajda-esp-ligo.jp/jp/prago/prago-j.htm>

(プラハ宣言 日本語版)

この宣言は、以下の7つの原則で成り立っています。

1. 民主性 (Demokratio)

ある言語を母語にする人が有利になるような不平等を打破し、民主的なコミュニケーションを保障する。

2. 民族を越えた教育 (Transnacia edukado)

エスペラントを学ぶことで、子供たちは、国境を越えた世界を学ぶ。

3. 教育上の効果 (Pedagogia efikeco)

外国語学習の導入としてエスペラントは有効。

4. 多言語性 (Plurlingveco)

エスペラントを学ぶことで、母語以外の言葉を学べる。

5. 言語上の権利 (Lingvaj rajtoj)

言語間にある力の差が、言語の平等な取り扱いを危うくしている。エスペラントは言語の権利を保障する運動である。

6. 言語の多様性 (Lingva diverseco)

言語の多様性は豊かさの源泉である。エスペラントはこれを保障する運動である。

7. 人間の解放 (Homa emancipigxo)

エスペラントは各自の文化や言語の独自性に根ざして、人類の共同体に参加する運動である。

*JEI: Japana Esperanto-Instituto

*UEA: Universala Esperanto-Asocio

北海道エスペラント連盟とアイヌ神謡集

北海道では、1919年の北海道大学エスペラント会の結成、1925年2月になって札幌エスペラント会が結成されました。この間、札幌、函館、小樽、さらに旭川、釧路、根室など、道内各地に地方会ができ、全道的組織に発展する準備が整いました。このような中で道内のエスペラント会が集まって、1932年3月に北海道エスペラント連盟 (Hokkajda Esperanto-Ligo 略して、HEL) が、創立されました。

その後も、各地に地方会ができ、運動は順調に発展して1936年(昭和11年)には、日本エスペラント大会を札幌で開くほどになりましたが、1931年の満洲事変以後、日本は次第に戦争のための国家体制作りを進め、エスペラントなど文化運動への監視・統制は厳しくなってきました。

エスペラント運動とは、中立の国際語の普及実用に努めること、すなわち平和目的の国際交流がその中心なので、戦争が始まるとその活動の場を失うことを意味しました。国内での会合も外国との文通もすべて特高警察の監視下におかれまして、戦況が厳しくなるにつれて連盟も活動ができなくなり、1943～1945年(昭和18～20年)の間は、毎年開催されていた北海道エスペラント大会も開かれなくなりました。

現在、北海道エスペラント連盟では、北海道におけるエスペラントの学習・普及活動、そして民間による国際交流と国際平和をめざして活動しています。また、無数の文通による交流、また直接には優に百人を超す海外からのエスペランティストの来道がありました。

毎年開催されている日本エスペラント大会については、戦後、1968年・1988年と戦前も含め過去3回北海道で行われ、日本におけるエスペラント運動の拠点のひとつとしての役割もはたしました。1968年の大会では、355名、1988年の大会では、457名の参加がありました。

近年は、毎年開催される世界エスペラント大会をはじめ、世界各地の国際的学習交流活動に連盟員が参加しています。また機関誌の発行 (Heroldo de HEL) やエスペラントによる道内各地の観光案内パンフの作成 (苫小牧市の観光、「札幌芸術の森」の案内など) の他、出版活動ではアイヌ神謡集のエスペラント訳本 (Ainaj Jukaroj) などがあります。Ainaj Jukaroj は、国際的にも高い評価を得ています。

エスペラントは国際交流のための言葉です。ユネスコの東西文化交流計画に沿って、日本の文学作品もかなりエスペラント訳されています。北海道では、民話のエスペラントへの翻訳を考えましたが、ここはもともとはアイヌの土地であるということで、アイヌ文化を紹介することになりました。

そこで、北海道エスペラント連盟の有志が集まって、知里幸恵編「アイヌ神謡集」をエスペラントに翻訳し、出版しました。(1979年初版、1989年第3版)改訂版には、この神謡集の中の一編のカムイユーカラ(神謡)を、アイヌ語原文で理解できるように、そのアイヌ語の文法解説と小辞典があります。これは、アイヌ語研究者の切替英雄氏が、エスペラントで作成したものです。

「アイヌ神謡集」のウェブ版を以下のところに用意しています。

<http://www.hokkajda-esp-ligo.jp/jp/jukaroj.htm>

北海道エスペラント連盟のホームページもご覧ください。

<http://www.hokkajda-esp-ligo.jp/jp/index-j.htm>

何かありましたら、以下のところにご連絡ください。

連絡先

北海道エスペラント連盟・事務局

〒060-0808

札幌市北区北8条西3丁目札幌エルプラザ2階

市民活動サポートセンターレターケース

北海道エスペラント連盟

電子メール: hokkaido_esp_ligo@yahoo.co.jp

アイヌ神謡集と私

松葉菊延

1926年10月、「ラ・レブオ・オリエンタ」（日本エスペラント学会機関誌）にアイヌの叙事詩ユーカラの一編「トーロロ ハンロク ハンロク！」を私が翻訳発表してから50年が過ぎた。

アイヌの少女 知里幸恵が、アイヌの叙事詩をローマ字表記の原文と完璧な日本語訳とを対訳として編集した「アイヌ神謡集」の第一版の発刊後間もなく、横浜にいた友人、小河原幸夫君が、これをエスペラント訳するように熱心に勧めてくれたからであった。

中学時代からエスペラントをよく話せた彼は当時国学院大学の学生であり、同大学には世界的に知られたアイヌ学者、金田一京助教授が在籍していた。小河原君が何故あれほどまでも熱心に、ユーカラのエスペラント訳を私にすすめたのか、今に至るまで私にとってはなぞである。当時のごく少数の専門家以外はユーカラとは何かを知る人はほとんどなかったし、アイヌ文学の存在を知る人も皆無と言ってよかった。私は単なる好奇心から彼の勧めに従ったのだった。

知里幸恵の「神謡集」研究に取りかかると同時に、アイヌ語の文法書を探し求めたが、当時はバチューラ博士著のぶ厚いアイヌ-英-日本語辞典しかなく、その辞典も私を混乱させるだけで役に立たなかった。

その時まさに青天のへきれきのように、奈良から笹谷良造という偉大な協力者が現れた。彼はかつて国学院の学生の時、金田一博士の講義を受けていた。私がアイヌ語文法で行き詰まっていることを、小河原君が笹谷氏に知らせてくれたものと思われる。同情した笹谷氏は金田一教授の講義をていねいに筆記したノートを私に貸してくれたのである。

このノートは私にとって実に貴重なものだった。私はその全文をノートに書き写し、その内容を学びとっていった。そして「神謡集」13編のうちの1編の翻訳を試みた。しかし、私の頭にのしかかって離れぬ難問が残っていた。訳文はどんな形式になればよいのか？

ユーカラは吟唱詩だから、それにふさわしい形式があるはずである。しかし私はその形式を見つけることができなかった。袋小路に入ってしまった私を見て、小河原君は私を、当時本郷区森川町に居住されていた金田一博士のお宅へ案内してくれた。

博士は謙虚で控えめな紳士で、やや女性的な高い調子の声が特に印象的だった。ぶしつけな私の幼稚な、ときに愚劣な質問にも博士は いたう事なく真摯に答えてくださった。 私が思い切って、「ユーカラをアイヌ語で吟唱してみ

ますから批判してください」とお願いすると、こころよく耳を傾けてくださり、ほほえみながら、「よろしい！ その通り！ 立派です！」と行ってくださった。しかし詩の形式についての私の質問に対しては「ユーカラには厳格なきまりはない。短い詩句を自由にくり返していただけます」との簡単なお答えだった。興奮さめやらぬ思いで私は博士宅を辞去したのである。

博士にお会いしたのはこれが最初で最後となった。文化勲章等を受けられたときはもちろんテレビで見た。博士の随筆「心の小道」をエスペラント訳したときや、日本語文法上の問題点をおたずねしたときは、ていねいなご返事をいただいた。

私は知里真志保博士にも、おそらく彼が東大の学生だったときと思うが、一度会ったことがある。私を彼の所へ案内してくれた友人は当時海軍省の艦政本部造船部に勤務していたエスペランティストの宗近真澄君だった。宗近君は真志保と連絡があり、私がアイヌ語やユーカラに関心あることを知って、彼に引き合わせてくれたのだった。

私が一度だけ会った知里真志保は、下宿の一室で、私の記憶が確かであれば、着物姿で、机の上に開かれたままのカーマ・ストラのフランス語訳を前にして座っていた。その時彼となにを話したかは、もう全く記憶にない。しかし彼の暗い表情と、やりきれないほど重苦しい声色は、忘れられない印象を私に残している。この陰気な青年が、のちに偉大なアイヌ学の権威になろうとは、どうてい想像できることではなかった。

私のユーカラ翻訳は、たった一編で終わってしまった。それは、納得できる詩の形式を見出すことができなかつたからであるが、同時に、エスペランティストであるというだけの理由で、私から生活手段を奪い去った軍国主義の黒い手のためでもあった。このために私はその後エスペラントを放棄し、終戦までの間屈辱と貧困・絶望の生活を余儀なくされてしまった。

5年前友人の星田君から知里幸恵編「アイヌ神謡集」の全編をエスペラント訳するという崇高な計画を知らされ、協力を求められたときは、言い知れぬ感激を覚えずにはいられなかつた。

「遅くはなつても、失われてはいない（今からでも間に合う）」とのことわざがある。半世紀遅れて、同じ者の手でなされなかつたにせよ、この事業は引き継がれたのだ！

金田一博士、知里姉弟、宗近君、私にとって決して忘れられないこの人達は、今はもういない。功成り名遂げて89才の天寿を全うされた金田一博士に対して、他の3人は何と若くして逝ってしまったことか。特に花の若さをそのまま散らせた幸恵の死は、彼女を愛する人達をどんなに嘆き悲しませたことだ

ろうか！ たまたま彼女よりふた月早く生まれた私だけが、今なお貧しく、さ
れどやすらかに生き延びている....

私に初めてアイヌ語とアイヌ文学への目を開かせ、ユーカラ翻訳への道を開
いてくれた小河原君については、学業を終えると間もなく、若い奥さんに「留
学する」と言い残して突然渡米した、ということ以外何も知らない。
これ以後一切の消息は絶えたという。生死のほどは神のみぞ知るところであ
る。

(1978. 12. 15)

一億を越える日本国民は三千キロに達する日本列島全域にわたりほとんど単一民族と見られているが、日本には一つの少数民族が存在することを忘れてはならない。その言語は少なくとも20世紀までは伝えられていたが、もう日常は使われぬし*₁)、先祖伝来の宗教は既に失われ*₂)、その血は混血によって日本人の中に拡散して行きつつはあるのだが*₃) — その民族の名は「アイヌ」という。

現在アイヌ系住民は主に列島最北端の島、北海道に住んでいる。しかし1945年迄は、彼らは樺太（サハリン）、千島列島にも住んでいたが、ソ連軍の占領により北海道に引き揚げざるを得なかった。

アイヌ民族の発祥についてはまだ定説はない。身体的特徴から日本人一般とは差があるとされるが、本州北部の日本人とは若干の類似が認められている。この点から、アイヌは数千年前の日本民族の形成に当たってなんらかの寄与をした、とみる人類学者もある。

「古事記」や「日本書紀」などの日本の古い文献には大和朝廷による蝦夷征討の記述が多い。当時の日本人（ヤマト人）は、蝦夷は未開の異民族だと理解していた。

「蝦夷」とはなにか？ これは長い間歴史学者の間でも謎とされてきた。古文書によると「山を登ること飛禽（ひきん；飛ぶ鳥）の如く、・・・、・・・鬢髪（びんぱつ；頭の左右両側の髪）多くして遍身（へんしん；体中）に毛を生ぜり・・・」などの描写がある。日本人一般にくらべてアイヌは多毛であることから、蝦夷は当時東北日本に住んでいたアイヌだとの説がある。その土地へは大和勢力の侵入が続き、征討、欺計がくり返された末、本州の蝦夷すべてを支配するに至った。

現在もなお本州東北部に、明らかにアイヌ語起源と見られる地名が多く残っていて、この説の証拠となっている。一方これに反対する学者たちは、本州東部で発掘された古代人骨はアイヌに似ておらず、蝦夷は辺境にあって文化のおくれた日本人だと主張する。

現在一般的な見解では、上記の地名から推定されるように、かつてアイヌは少なくとも本州北部には住んでいた、だからその地域の猟師の用語にはアイヌ語に似たものが多い、といわれている。

既に5世紀の中国の文献（「宋書」夷蛮伝倭国の条）の倭王（日本の王）武の上表文に「東の方毛人五十五国を征し」の描写があり、「古事記」には伝説的

英雄ヤマトタケルの蝦夷征伐が記されている。7世紀になると阿倍比羅夫が、後方羊蹄（しりへし）まで軍を進めたと「書紀」に記録されているが、これが北海道か、津軽かについては説が分かれている。^{*4)}

しかし蝦夷の反乱は、土着、俘囚（一旦服従したもの）を問わず、本州東北部で11世紀までくり返された。

15世紀以後、松前藩が、蝦夷地と呼ばれていた北海道南部にその支配を確立し、くり返されたアイヌの反乱を鎮圧してその範囲を広げていった。

1669年、和人（日本人）の圧迫に抵抗するアイヌの最後の反乱が、剛勇で聞こえたシャクシャインに指導されて勃発した。アイヌは蝦夷地（現北海道）の南海岸・西海岸のほとんど全域で蜂起し、各地にいた和人計240余人を殺し、和人支配の本拠である松前をめざして進軍を開始した。彼らの武器は槍、太刀、毒矢だったが、松前藩の侍たちの鉄砲の一斉射撃によって押し戻された。シャクシャインは根拠地シベチャリに引き上げて抵抗したが、和人のだまし討ちによって殺された。こうして全アイヌ民族は松前藩の支配下に入り、漁場での奴隷労働と搾取のもとにおかれることになった。

1868年の明治維新以後の明治新政府は日本の、特に北海道の近代化を押し進めた。

アイヌは本来狩猟民族だった。政府はそれを農民化しようとしたが順調には進まなかった。農民、商人、労働者など、渡来の和人がどんどん増えて、アイヌたちは新しい技術も、そのための教育もなく、次第に北海道住民の最下層を形成することになった。このような貧困と不平等の状態は、基本的には現在も残っている。「法の下での平等」は、掲げられているけれども。

現在彼らは北海道内各地に、周囲の和人たちと全く同様に暮らしている。観光地では観光事業にかかわるものも多い。そこで売るために彫刻作品を作る青年グループもある。混血（和人と結婚）は普通のことで、純血のアイヌはもう見当たらない。日常語としてアイヌ語を使う人はいない。先祖伝来の言葉を知っているのは、ほんの一部の高齢者だけである。

アイヌには文字がなく、独自の口誦文学を語り伝えてきた。彼らの信仰は多神教で、太陽、火、先祖、湖、山、森、獣、魚、鳥などが神として崇められる。これら神々の行いや教えを伝えるためにできたものが神謡（カムイ・ユカル）と呼ばれる叙事詩である。

ユカルには「まねる」という意味があるから、古い時代には語り手は神がかり状態で動物神などの動作をまねて踊ったものと思われる。これと別に英雄のユーカラ（オイナ）といわれるものもある。この主人公は神でなく人間で、はじめ幼少のころは「育ての姉」のもとで成長し、多くの試練に耐え、海から来る敵に打ち勝って人々に平和をもたらす英雄として描かれる。このほかにも

さまざまな物語、恋の歌、民謡などがあるのは世界のほかの民族と変わらない。神謡は、かつてのアイヌの世界観や道徳をよく写し出している。

すなわち、

- 1) この世のすべては神々のなすわざである。
- 2) いい人間 (=アイヌ) には神は鳥、獣、果物、貝など、豊かな恵みを与えたまう。
- 3) これらの獲物は神々から賜ったものだからものだから、それを捕らえるのも殺すときも感謝の念をもって、また宗教的な儀礼をもって行わねばならない。
- 4) 善良なアイヌは獲物があつたときは宴を設けて神に感謝し、酒を捧げることがを忘れてはならない。そうすると神はさらに獲物をくださるだろう。
- 5) 山も川も海岸も、アイヌとほかの生き物たちすべてのものだから、善良なアイヌは自然を汚さないように気をつけ、魚を捕るために毒を流したりしてはならない。

1986年9月、当時の中曽根首相は談話の中で、日本国民は単一民族というすぐれた性質があるが、米国には黒人、プエルトリコ人、ヒスパニックなどもあるから知的水準は低い、と語った。

彼はこれによって米国の少数民族を侮辱しただけでなく、日本のアイヌ民族の存在をも無視したのである。直ちにアイヌ側から強い抗議の声が上がった。その後彼は先の発言を訂正し、独自の文化をもつアイヌ民族の存在を認めた。しかしアイヌたちはもう新たな前進を始めている。1899年(明治32)制定の「北海道旧土人保護法」に代わってアイヌに人間としての尊厳を保証し、アイヌ語・アイヌ文化に関する講義を大学に導入し、アイヌ民族の代表を国会に送る新しい法律を求める運動である。^{*5)}

こうして北海道内のあちこちでアイヌ語やアイヌ文化の講座が始まった。アイヌ系の作家萱野茂は自ら経営する幼稚園の児童にアイヌ語を教えている。1987年10月18日STV(札幌テレビ)ラジオは萱野講師による、世界最初のアイヌ語講座の放送を開始した。^{*6)}

最近アイヌ民族の歴史や差別について発表する作家たちが見られる。アイヌ系の作家もいるが、一様に日本(和人)側からの圧迫を鋭く告発し、かつてのアイヌモシリ(アイヌの国土)を自分のまわりに構築することをめざしている。原文は、1989年時点に書かれたものなので、星田さんと協議の上、現

状（2003年現在）も踏まえた注釈を作りましたので、以下に示します。これは、原文にはありませんので、ご注意ください。（文責：横山裕之）

*1) 「アイヌ語の話者はもう十指に満たない」というようなことをよく言われていましたが、最近ではアイヌ語の「潜在話者」が相当数いるのではないかとされるようになりました。これは、研究者、マスコミ、和人全般への不信感から、研究に積極的に協力することが差別・偏見などのマイナス要因となることを恐れ、あえて協力をしない人が多数いると考えられるためです。

*2) アイヌ民族への圧力・差別によって、古来の伝統的な信仰生活の多くが失われましたが、現在でも、北海道各地で、サケやシシャモなどを迎える儀式や、イチャルパ（祖先供養）、その他慰霊祭などが行われています。そこで行われるアイヌ式の神への祈り「カムイノミ」の祈り言葉はアイヌ語です。こういった儀式は最近行われる機会が増えてきています。

*3) アイヌ民族の人口は、北海道が1999年に行った「ウタリ生活実態調査」によると、<2万3767人>ということですが、これは、自分をアイヌ民族だと認めている人を対象としていますので、実数ではありません。差別や偏見によって自分がアイヌであることを明らかにするのがままならないという状況のなかでは、その人口もはっきりしないというのが現状です。なお、混血と民族への帰属問題は別の問題です。混血とは、どの民族にもあることで特にアイヌ民族に限ったことではありません。また、帰属問題については、混血の問題とは無関係に本人の意思を尊重すべきと考えます。

*4) 原文の104ページ下から9行にある *En la 9a jarcento Generalo Sakanoue-Tamuramaro ekspediciis ĝis nuna Hokkajdo.*（9世紀になると坂上田村麻呂が、現在の北海道まで軍を進めた。）は、*En la 7a jarcento Abe-no-Hirahu ekspediciis ĝis Ŝiriheŝi laŭ “Nihon-ŝoki”.* *Troviĝas du opinioj, la unu - Ŝiriheŝi situas en nuna Hokkajdo, la alia - en nuna Cugaru, la plej norda areo de la ĉefa japana insulo Honŝuu.*（7世紀になると阿倍比羅夫が、後方羊蹄（しりへし）まで軍を進めたと「書紀」に記録されているが、これが北海道か、津軽かについては説が分かれている。）に訂正します。

*5) 1997年に「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統に関する知識の普及及び啓発に関する法律（通称「アイヌ文化振興法」）」が施行されました。しか

し、この法律は、その中心をアイヌ文化の振興に絞っているという特徴があり、1984年に、アイヌの民族団体である（社）北海道ウタリ協会が総会決議した「アイヌ民族に関する法律（案）」と比べると、その基本精神、具体的内容が全く異なったものとなっています。先進諸国の立法例にもある国会や地方議会における優先的議席の確保の条項はありません。

*6) 2003年3月現在、（社）北海道ウタリ協会が開設しているアイヌ語教室は、北海道内の平取町二風谷、旭川、浦河、釧路、札幌、白老、千歳、静内、鶴川、帯広、白糠、登別、苫小牧、様似の14地区です。この他に、他団体が主催する学習会が、北海道内や関東・関西地区などで開催されています。なお、1989年から毎年、「アイヌ民族文化祭」というものが催され、各地の古式舞踊の保存会やアイヌ語教室を中心に、アイヌ文化を学んでいる人たちがその勉強の成果を披露しています。1994年にはアイヌ民族文化研究センターという北海道立の研究施設が札幌に設立され、その中で何人かの若いアイヌ人研究者が育ち始めています。

1987年萱野茂講師によって始まった、日曜朝のSTVラジオの「アイヌ語講座」は、その後講師の参議院議員就任により北海学院大学の藤村和久教授の「アイヌ語講座イランカラマテ」、1992年4月からは同教授の「アイヌ語講座イランカラマテ～アイヌのことばとくらし～」と、少し形を変えながら続いていましたが、1998年には、「アイヌ文化振興法」に基づいて設立された「(財)アイヌ文化振興・研究推進機構」が行う事業の一環として、「アイヌ語ラジオ講座」の放送が始まりました。テキストは無料で、STV（札幌テレビ）ラジオの毎週日曜の朝と毎週土曜の夜に放送しています。

アイヌ語の復興活動の一環として、その他にアイヌ民族の萱野志朗氏らが、アイヌ語ペンクラブという任意団体を設立し、1997年にアイヌ語新聞「アイヌタイムズ」の出版を始めました。また、2001年には、萱野茂氏らが、FM二風谷、愛称「FMピパウシ」の放送を始めました。放送のいくつかは、アイヌ語です。これらについては当連盟の以下のサイトでその一部をエスペラントで紹介をしています。（日本語のページにもリンクしています。）

（アイヌ語新聞）

http://aynuitak.at-ninja.jp/ATkana_utf-8_eo.htm（エスペラント版）

http://aynuitak.at-ninja.jp/ATkana_utf-8.htm（日本語版）

(FM二風谷)

<http://www.hokkajda-esp-ligo.jp/FMpipausi/listo.htm> (エスペラント版)

<http://fmpipausi.sakura.ne.jp/menu.html> (FM二風谷のページ)

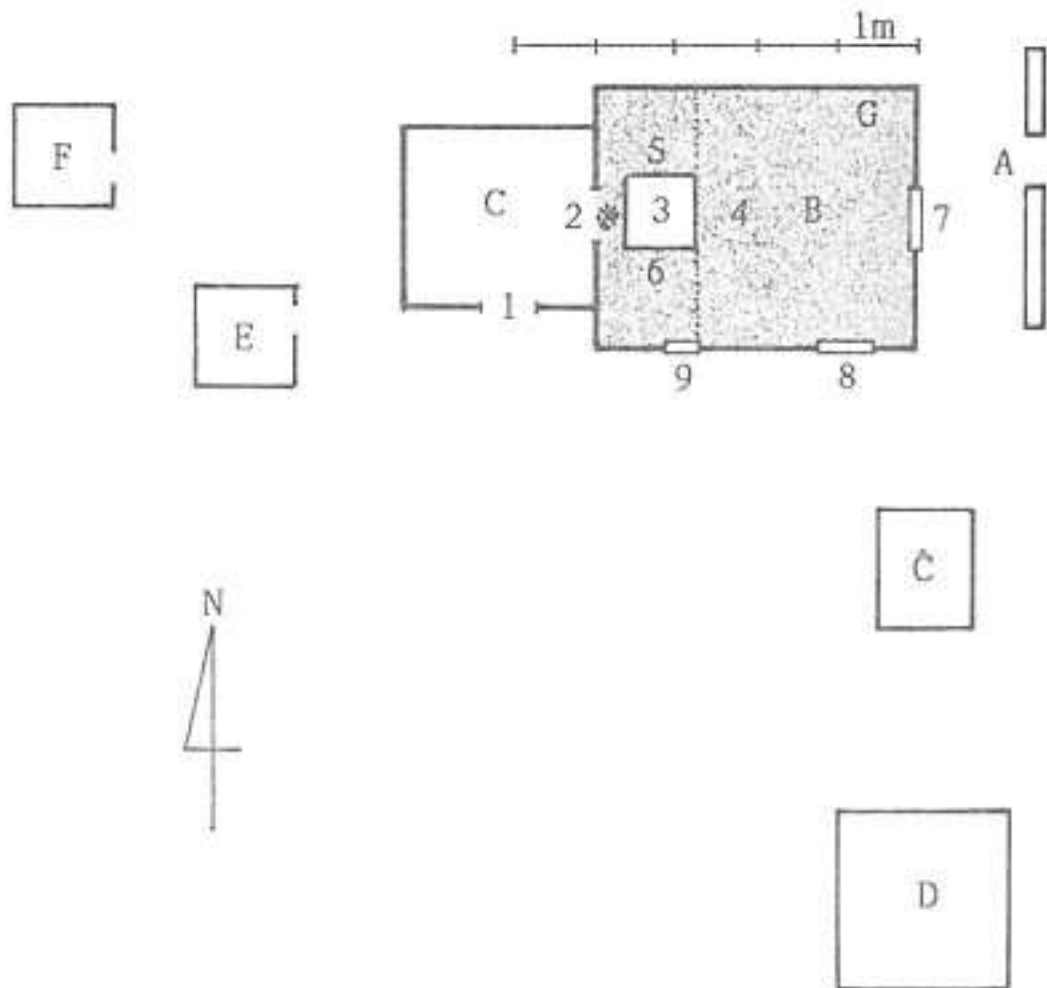
注釈の参考文献

- 1) 大野徹人 (1999) 「連載報告 多言語社会ニッポン アイヌ語②」『ことばと社会』2号、三元社
- 2) 大野徹人 (2001) 「連載報告 多言語社会ニッポン アイヌ語⑤」『ことばと社会』5号、三元社
- 3) 小笠原信之 (2001) 『アイヌ近現代史読本』、緑風出版
- 4) 中川裕 (1997) 『アイヌの物語世界』、平凡社

アイヌの家と付設物の見取図

(知里真志保：「アイヌ住居に関する若干の考察」

「民族学研究」第14巻第4号、昭和25年5月より抜粋)



(昭和25年3月22日、二谷国松翁(平取町二風谷)談となっております。)

- A. 屋外の祭壇、元の言葉「イノウサン inaū-san (幣・棚)」
- B. 母屋、元の言葉「チセ čise (家)」
- C. 納屋、「セム sem」
- Ĉ. 小熊のおり、「ヘペレセツ heper-set」
- D. 倉、「プ pu」
- E. 男便所、「オッカヨル okkajo-ru」
- F. 女便所、「メノコル menoko-ru」

1. 入口、元の言葉「ソユナパ soj-un-apa (外・の・戸)」(=外の入口) あるいは、「セム・アパ sem-apa (「納屋の・戸)」(=納屋への入口)。
2. 内側の入口、「アウナパ aũ-un-apa (内・の・戸)」あるいは「チセ・アパ çise-apa (家の・戸)」(=家の入口)。
3. 炉、「アペオイ ape-o-i (火・ある・所)」(=火の所) あるいは「アペ・ソッキ ape-sotki (火の・床)」(=火の床)。
4. 大切な客のための場所(貴賓席)、「ロルンソ ror-un-so (上方・にある・座)」。Gという角のそばには、宝壇があります。
5. 右座、「シソ si-so (本・座)」。家の主人夫妻のための席
6. 左座、「ハルキソ harki-so (左の・座)」。
7. 神窓、「ロルンプヤル ror-un-pujar (上方・にある・窓)」(=上座の窓)。「カムイ・クシ・プヤル kumuy-kus-pujar」(=神の・通る・窓)、「トゥキ・クシ・プヤル tuki-kus-pujar」(=酒杯の・通る・窓)、「イナウ・クシ・プヤル inaũ-kus-pujar」(=イナウ(木幣)の・通る・窓; イナウについては(原文の) 29 ページの ^{M2)} を参照) とも言います。

アイヌは、この窓は神の訪問のための入り口であると信じています。それで彼らは、いつもこの窓を通して、家の中へ獲物を持ってきました。というのは、

彼らは、獲物はこの世の姿の神であると信じているからです。

8. 左座の窓、「イトムンプヤル itomun-pujar (横についている窓)。」
9. 台所の窓、「ポン・プヤル pon-pujar」(=小さい・窓)。この窓のそばに台所があります。

※内側の入口(2)と炉の外枠の間に「ウトウル(下座)」があります。金田一博士によれば奴僕(どぼく)のためにあるそうです。知里真志保博士は、それは新しい時代に出てきたもので、以前には炉は納屋の土間に続いていたと主張しています。

熊祭りの写真

(*熊祭りとフクロウ祭りについては (原文の) 30 ページを参照)

(①②③は、白老で梅木孝昭氏が撮影 1963. 02. 09)



①

熊の死と同時に、熊の魂が天に行く道を清めるために東の空へ矢を放ちます。



②

神への贈り物と伝言と一緒に、天へ小熊の魂を送ります。



③

祭りの後には、神獣（熊）の頭は、イナウ（木幣）とともに祭壇の上に残しておきます。



④

へやの中の二人のアイヌの人たち。一人は口琴（ムックリ）を奏で、もう一人は、ゴザを織ってます。

（④は、二風谷で梅木孝昭氏が撮影 1960）

「アイヌ神謡集」から1つの韻文物語をアイヌ語で読むための文法の概略と単語集

切替英雄（アイヌ語研究者、エスペラント原版編者）

横山裕之（日本語版編者）

*これは、北海道大学エスペラント研究会で作成したものをベースにして、横山が若干内容を追加したものです。内容についての一切の責任は、横山にあります。

間違い等何かありましたら、以下のメールアドレスまでご連絡ください。

hokkaido_esp_ligo@yahoo.co.jp

目次

1. 一般的注意

1-1. アイヌ語と口承文芸

1-2. 原典と表記について

2. アイヌ神謡の例

3. 簡単なアイヌ語文法

3-1. 文と節

3-2. 動詞句

3-2-1. さまざまな動詞句

3-2-2. 派生動詞と合成動詞

3-3. 名詞句

3-3-1. 名詞句の省略

3-3-2. さまざまな名詞句

3-4. 副詞句

4. 「小オキキリムイが自ら歌った謡『クニサ クトウンクトウン』」を読むための単語集(34KB)

1. 一般的注意

1-1. アイヌ語と口承文芸

アイヌ語と同一起源の言語は見つかっていない。日本語と特に系統的な関係はない。言語構造はアルタイ語群のものに似ているが、非アルタイ語的な特徴をいくつか持っている。補充接頭辞といわれる e-, ko-, o- は非アルタイ語的な特徴の例である（4参照）。また、アイヌ語の抱合語的性質もアルタイ語とは共通しない（3-2-2参照）。

アイヌは固有の文字はもっていない。何人かのアイヌは自らの言葉を記述する努力をし、そのためにラテン文字、キリル文字、カナを使用した。しかし、現在ではカナだけが使われている。

アイヌ語をある程度のレベルで流暢に話せるアイヌの数はたいへん限られている。現在では9名（1979年）の優れた話者が知られているだけである。

アイヌは豊かな口承の伝統をもっている。非常に多くの韻文の物語が世界文学の中に永久に残るであろう。韻文の朗唱のときには、口語文体（会話）とは異なる文体が使われる。より複雑な形態が詩句の文体の際だった特徴である。

物語の中では、英雄や神が自分の経験を（一人称で）話す。アイヌ語学の偉大な先駆者、金田一京助博士はアイヌの口承を「一人称説話体（一人称の説述体）」と名付け、このことをアイヌ口承文芸の特徴的な性格であると考えた。

民族の尊厳を取り戻すアイヌの運動は少しずつ活気を帯びてきている。同時にアイヌ語とその文化を保存する、アイヌとアイヌ学者の努力も続いている。

1-2. 原典と表記について

訳注：切替氏のエスペラントの原文は、アイヌ神謡集のエスペラント訳本である“Ainaj Jukaroj”を前提として書いており、エスペラント訳のため、アイヌ語の「音」の表記はエスペラント式のローマ字表記になっています。これだと、ê、j、ÿ が、現在主流になっているローマ字表記（それぞれ、c、y、w に対応）とは異なるので、ご注意ください。なお参考資料として、エスペラントの文字の読み方を下記に示します。また、エスペラント式ローマ字によるアイヌ語の発音の説明もあわせて示しました。

「アイナイ ユカロイ (Ainaj Jukaroj)」はアイヌ女性、知里幸恵によってアイヌ語と日本語で書かれており、13編の2言語の韻文物語が含まれている。原典の日本語の題名は、“アイヌ神謡集”である。（字義は、“アイヌ民族の神謡集”である。）この著作のアイヌ語の題名は与えられていない。アイヌ語で、「神謡」に対応する語が おそらく kamuj jukar (カムイ ユカラ) である。これは、アイヌの口承文芸の様式の一つである。この韻文集（原典）は、1923年に東京で出版された。19歳の著者が亡くなって1年後のことだった。

神謡集の中で一番短い韻文物語が、「Pon Okikirmui yaieyukar (ポン オキキリムイ ヤイエユカラ)」、「Kutnisa kutunkutun (クツニサ クトウンクトウン)」、「小オキキリムイが自ら歌った謡『クツニサ クトウンクトウン』」である。アイヌ語の原文を2に掲載している。

原文で知里は複数の詩句を一行に置いており、それぞれの詩句の間に2字分の空白をあけている。本稿では各詩句が一行になるよう配置しなおした。

折り返し句 (サケヘ sakehe) 「クツニサ クトウンクトウン」は、実際に歌う場合には、物語の冒頭と、各詩句の最後（ただし最後の2詩句は除く）に現われる。原著者はこの折り返し句をすべて省略している。アイヌ語原文のとな

りに、現在のアイヌ学の書き換え規則（分かち書きの仕方）に従ったテキストを示した。この書き換え規則はアイヌ語の文法と音韻の体系を表わすのに適している。本稿では、エスペラントの読者のために さらに変更を加えたものを使用した。

アイヌ語の音韻体系は、次の通りである。

母音

i u
e o
a

子音

p t k '
ç
s h
r
m n
j ũ

原文の表記と書き換えた文字との対応は次のようである。

(原文 > 書き換え文)

ch >
ç
chep > çep “魚”

s~sh >

s
sa > sa “下方”(変更なし)
ash > as “私は”

shine > sine “ひとつ”

(音節末と/i/の前では「シ

(s)」のように読む)

(注) si は、「スイ」ではなく、si 「シ」と読む。

i (音節末) ~ y > j

rai > raj “死ぬ”

ya > ja “～か? (疑問の終助詞)”

u (音節末) ~ w > ũ

hau > hau “声”

wa > ũa “～して”

/ʼ/ (声門破裂音) は原文には書かれていない。書き換え文でも省略した。

/r/ は日本語の“r”。

音節の構成は次のようになる。

子音 + 母音

(開音節) 例: ci “私は”

子音 + 母音 + 子音

(閉音節) 例: cep “魚”

/p/と /t/と /k/ は音節末では破裂しない。 /ʼ/と /c/と /h/ は音節末に現われることはない。

ひとつの詩句は通常4つか5つの音節からなる。5音節の句が最も安定している。

単語のアクセントは、閉音節の場合には第一音節にあり、開音節の場合には第二音節にある。

エスペラントへの翻訳は、アイヌ語原文の構造を反映するように努めた。読者が訳文を注意深く読んで、アイヌ語原文と比較するよう願う。

アイヌ語の構造を理解できるように、簡単な文法を3に、単語集を4に用意した。これらを参照することで、原文と訳を比較しながら読む助けとなるだけでなく、アイヌ語を直接読むことが可能となる。単語集は原文ではなく、書き換え文をもとに作成した。

2. 「アイヌ神謡」(カムイユカラ) の例

原文

書き換え文

訳

Pon Okikirmui Yaieyukar "Kutnisa kutunkutun"

Pon Okikirmuj jajejukar "Kutnisa kutun kutun"

小オキキリムイが自ら歌った謡 "クツニサ クトゥンクトゥン"

Shineantota

Sine an to ta

ある日に

petetok un

pet etok un

(川の) 水源の方へ

shinotash kushu

sinot as kusu

(私が) 遊ぶに

payeash awa,

paje as a ũa,

(私が) 出かけたら (思いがけなく)

petetokta
pet etok ta
(川の) 水源に

shine ponrupnekur
sine pon rupnekur
一人の小男が

neshko urai
nesko uraj
胡桃(くるみ)の木の梁(やな)を

kar kushu
kar kusu
たてるため

uraikik neap
uraj kik. Neap
(胡桃の木の) 杭を打っていた。(それに

kosanikkeukan
kosan ikkeū kan
下げた) 腰を

punashpunash.
punas punas.
幾度も上げて立っている。(腰を曲げ曲げしている。)

Unnukar awa
Un nukar a ũa
(男は) 私を見ると、(予期しなかったように)

ene itaki:
ene itak i:
次のように言った。(いう事には...)

"Ehumna?

"Ehumna?

「誰だ?

Chikarkunekur

Ĉi karku ne kur,

私の甥（である人）よ、

unkashuiyan"

un kasuj jan."

私に手伝ってお呉（く）れ」

ari hawean.

ari haŭean.

と言う。

Inkarash ko

Inkar as ko

（私が）見ると

neshko urai

nesko uraj

胡桃の梁

nepne kushu

ne p ne kusu

なものであるから、

neshko wakka

nesko ŭakka

胡桃の水、

nupki wakka

nupki ŭakka

濁った水が

chisanasanke,
êisanasanke,
流れてきて、(自然の力が下流へ下させて、)

kamuicheputar
kamuj êep utar
鮭子どもが

hemeshpako
hemespa ko
上って来ると

neshko wakka
nesko ũakka
胡桃の水が

kowen kushu
koŕen kusu
いやなので、

chish kor hoshippa.
êis kor hosippa.
泣きながら帰ってゆく。

Chirushka kushu
Êi ruska kusu
私は腹が立ったので、

ponrupnekur
pon rupnekur
小男の

kor uraikiktuchi
kor uraj kik tuêi
持っている杭を打つ槌を

chieshikari,
êi esikari,
私は引ったくった。

ponrupnekur
pon rupnekur
小男の

ikkeunoshki
ikkeũ noski
腰の央（おう）を

chikik humi
êi kik humi
私がたたく音が

tokkosanu.
tokkosanu.
「トク（ボン）」と響いた。

Ponrupnekur
Pon rupnekur
小男の

ikkeunoshki
ikkeũ noski
腰の央（おう）を

chioarkaye,
êi oarkaje,
（私は完全に）折ってしまっ

chioanraiike
êi oanrajke
（私は完全に）殺してしまい、

poknamoshir
pokna mosir
地獄へ（地下の世界へ）

chikooterke.
ĉi kooterke.
（私は）踏み落としてやった。

Nea neshko uraini
Nea nesko uraj ni
彼の（その）胡桃の木の杭

chiosausawa
ĉi osaŭsaŭa
（私はその根）を（何度も）揺り動かして

inuash aike,
inu as a ike,
（私が）聞いてみると

iwan poknashir
iŭan pokna sir
六つの地獄の（六つの地下の世界の）

imakakehe
imakakehe
彼方まで

chioushi humiash.
ĉiousi humi as.
（杭の先が）届いている様だ。

Orowano
Oroŭano
それから

ikkeukiror

ikkeū kiror

腰の力（アイヌは骨髄に力の源があると信じている）

montumkiror

mon tum kiror

体の中の力を

chiyaikosanke,

çi jajkosanke,

（私は）出して、

neuraini

ne uraj ni

その（梁の）杭を

shinrichi wano

sinriçi ũano

根元から

chioarkaye,

çi oarkaje,

（私は完全に）折ってしまい、

poknamoshir

pokna mosir

地獄へ（地下の世界へ）

chikooterke.

çi kooterke.

私は（杭を）踏み落してしまった。

Petetoko wa

Pet etoko ũa

水源から

pirka rera
pirka rera
清い風

pirka wakka
pirka ũakka
清い水が

chisanasanke
ĉisanasanke
流れて来て、

chishkor hoshippa
ĉis kor hosippa
泣きながら帰って行った

Kamuicheputar
kamuj ĉep utar
鮭どもは

pirka rera
pirka rera
清い風

pirka wakka
pirka ũakka
清い水に

eyaitemka
ejajtemka
気を恢復（かいふく）して

wenminahau
ŭen mina haũ
大きな笑い声（大騒ぎ大笑して）

wenshinothau
ŭen sinot haŭ
大きな遊ぶ声 (遊び)

pepunitara kor
pepunitara kor
(ペプと) 笑いさざめく声とともに (笑いさざめきながら)

hemeshpa shiri
hemespa siri
(鮭子どもが川を) 上がって来た

chopopatki.
ĉopopatki
「チョフチョフ (パチャパチャ)」と水が跳ねる音がする。

Chinukar wa
Ĉi nukar ŭa
私はそれを見て、

chierameshinne
ĉi eramesinne,
(私は) 安心をし、

petesoro
pet esoro
(川の) 流れに沿って

hoshippaash. ari
hosippa as. Ari
(私は) 帰ってきた。と

Pon Okikirmui isoitak
Pon Okikirmuj isoitak.
小さいオキキリムイが物語った。

3. 簡単なアイヌ語文法

3-1. 文と節

文は1つまたは複数の節から成る。

文は [終助詞] をもち得る。 単語集の ja と jan を参照。

命令文では主語は現れない。

文節はさまざまな句から成る。たとえば、rupnekur pet etok ta mina 「おとなが川の源で笑う。」という節は、名詞句 rupnekur 「おとな」と、副詞句 pet etok ta 「川の源で」と、動詞句 mina 「笑う」から構成されている。

副詞句は、助詞のついた名詞句、もしくは副詞から成る。

3-2-1. さまざまな動詞句

次のような動詞句の型が存在する。

[一項動詞]

mina 「～は笑う」

[二項動詞]

kik 「～は～をたたく」

[動詞] + [助動詞]

paje a 「～(複数)はもう行った」

など。

いくつかの一項動詞は複数形を持つ。as「私」という人称接語がそのような動詞に付くと、意味の上で単数にもかかわらず、複数形となる。

rupnekur oman 「おとなが来る」
rupnekur utar paje 「おとなたちが来る」
paje as 「私が来る」
(paje は oman の複数形である。)

3-2-2. 派生動詞と合成動詞

ばらばらにすると動詞としての機能を失うような形を、[動詞語基]という。動詞語基は自動詞的、または他動詞的のどちらかである。自動詞語基は、単独では一項動詞となる。他動詞語基は単独では二項動詞となる。動詞語基は、さまざまな接辞、名詞や他の動詞語基が付けられて、派生動詞や、合成動詞になる。付加された動詞語基は合成された動詞のなかで副詞として働く。(単語集の *çi-sana-san-ke* を参照。) 次の例はアイヌ語の豊かな派生語と動詞形成を示唆する。

自動詞語基 raj
一項動詞 raj 「～は死ぬ」
二項動詞 raj-ke 「～は～を殺す」
三項動詞 e-rajke 「～は～を～で殺す」
一項動詞 jaj-rajke 「～は自殺をする」
二項動詞 e-jajrajke 「～は～で自殺をする」
自動詞語基 an
一項動詞 an 「～がある」
一項動詞 haŭe-an 「～が話す」 (直訳では「～の声がある」)
他動詞語基 nu

二項動詞 nu 「～が～を聞く」
三項動詞 nu-re 「～が～に～を聞かせる」
一項動詞 i-nu 「～が聴取する」
二項動詞 inu-re 「～が～に聴取させる」

動詞の機能を欠いた形は、接尾辞の助けにより動詞語基となることがある。
それらの形のなかで、子音+母音+子音という音節からなり、擬音語の性格を持つものを、私は仮に「kvk 語根」と呼ぶことにする。

訳注: 「kvk」はエスペラントでの子音(konsonanto)と母音(vokalo)の頭文字をとったものです。一般的には、英語の子音(consonant)と母音(vowel)の頭文字をとって、cvc 語根と言います。

kvk 語根 tok- (擬音語) 「ボキッ」
一項動詞 tok-kosanu 「～は「ボキッ」と音がする」
kvk 語根 saŭ- (擬音語) 「ザワ」「ユラリ」
二項動詞 saŭ-a 「～は～をゆさぶる」

3-3. 名詞句

3-3-1. 名詞句の省略

名詞句は省略することができる。下記の例で「～」という記号はその可能性を示している。しかし、一人称、二人称を表す人称接語は省略できない。人称接語については 3-3-2 を参照。

haŭe 「～の声」(haŭ 「声」の所属形)

rupnekur haŭe 「おとなの声」
haŭe 「彼の声」
noski 「～の真ん中」(位置名詞)
ikkeŭ noski 「背中の真ん中」
noski 「その真ん中」
mina 「～は笑う」(一項動詞)
rupnekur mina 「おとなが笑う」
mina 「彼が笑う」
kor 「～が～を持つ」(二項動詞)
rupnekur tuĉi kor 「おとなが大つちをもつ」
rupnekur kor 「おとながそれを持つ」
tuĉi kor 「彼が大つちをもつ」
kor 「彼がそれを持つ」
ari 「～で(道具)」
tuĉi ari 「大つちで」
ari 「それで」

3-3-2. さまざまな名詞句

名詞句には次のような型が存在する。

[名詞] rupnekur 「おと
な」 [名詞] + [名詞の
所属形]

(名詞の代わりに、主格の人称接語がきてもいい。)

rupnekur haŭe 「大人の声」

ĉi haŭe 「私の声」

[名詞] + [位置名詞]

(名詞の代わりに目的格の人称接語がきてもいい。)

pet etok 「川の方 (すなわち川の源)」

un etok 「わたしの目指す場所」

[名詞] + [名詞的助詞]

ĉep utar 「魚」

[連体詞] + [名詞]

iŭan mosir 「六つの国々」

[一項動詞] + [名詞]

pirka ŭakka 「良い水」

(ŭakka pirka 「水は良い」はこの名詞句に対応する節である。)

[名詞] + [二項動詞] + [名詞]

1. rupnekur kor tuĉi 「おとなの持つ大つち」

2. tuĉi kor rupnekur 「大つちを持つおとな」

(rupnekur tuĉi kor 「おとなは大つちを持つ」は1、2の名詞句に対応する節である。)

[節] + [形式名詞]

rupnekur tuĉi kor ike 「おとなが大つちをもっていること」など。

直接動詞と関わる名詞句、つまり、「～」の記号で示されるものは、いかなる格表示も持たない。ただし、人称接語は格を表示する。下記の as, ĉi, un を参照。

rupnekur mina 「おとなが笑う」

mina as 「わたしが笑う」

rupnekur ĉi kasuj 「わたしはおとなを手伝う」

rupnekur un kasuj 「おとながわたしを手伝う」

二人称のための人称接語はそのような格変化形を持たない。また、三人称のための人称接語は存在しない。

一項動詞は名詞になり得る。mina 「～は笑う」 > 「笑い」

uraj kik 「～は川のさくを打ち込んだ」 > 「川のさくの打ち込み」

もつとも頻繁に見られる合成名詞の組み立ては [名詞] + [名詞] である。

uraj ni 「川のさくの杭」

mina haŭ 「笑い声」

uraj kik tuĉi 「川の柵を打ち込むための大つち」

3-4. 副詞句

次のような副詞句がある。

[副詞]

ene 「そのように」

[名詞] + [格助詞]

mosir ũa 「陸から遠く」

[名詞] + [位置名詞] + [格助詞]

pet etok ũa 「川の源から」

[名詞] + [後置詞的副詞] (自立性の高い格助詞)

tuçi ari 「大つちで」

[接] + [接続助詞]

ĉep ĉis kor hosipi 「魚が泣きながら戻ってくる」 < ĉep {ĉep ĉis kor} hosipi

(ĉep ĉis 「魚が泣く」と ĉep hosipi 「魚が帰る」が kor 「…しながら」という接続助詞によって結合されており、ĉep ĉis kor 「魚が泣きながら」が副詞句と見なされる。) など。

4. 小オキキムイが自ら歌った謡『クッニサ クトゥンクトゥン』を読むための単語集

この単語集は、見出し語として 2 の書換え文に現れる全ての語・助詞・接辞を含んでいる。

接尾辞の前、接頭辞の後、派生語か合成語の間にハイフンを置く。

各見出し語の後に、語の種類、意味、文法的な説明を示す。

見出し語の後に、先の書換え文にあらわれた、その見出し語を含む全ての派生語、複合語を置いた。それらのうち、「>」印が前についたものは、別に見出し語としてある。

見出し語として、(語ではなく) 見出し語を含んだ句を置いたところもある。

A

a¹

[助動詞]

(ある事柄が、完了したことを示す。)

a ike > ike

a ũa > ũa

(指示連体詞の構成要素として)

>nea

-a²

[他動詞語基をつくる接尾辞]

>saũa

an

[一項動詞]

～が、存在する。

>haũean

sine an to ta > to (an to: 文字どおりには「存在する日」。)

ari

[後置詞的副詞]

～(道具)で

(例えば、Okikirmuj tuçi ari rupnekur kik 「オキキリムイが大槌でおとなをたたいた」。この語基には引用を導く機能がある。)

"..." ari haue an 「～は "...”と言う。(文字どおりには、「～は "...”で言う。)」

"..." ari itak ～は "...”と言う。

ari isoitak ～は、そのように語る。

as¹

[一項動詞] ～が立つ。

humi as > humi

>punas

as²

[人称接辞]

(主格; 一項動詞の後に置く。ci¹ および un¹ を参照。) 私は

hosippa as 私は家に帰る。

inkar as 私は見る。

inu as 私は聞く。

paje as 私は行く。

sinot as 私は遊ぶ。

-atki

[自動詞語基をつくる接尾辞] (kvk 語根の反復形に付き、kvk 語根が表わす音の繰り返しを示す。)

>êpopatki

ê

êep

[名詞] 魚。

kamuj êep 鮭。

êi¹

[人称接辞]

(第一に主格を表わす、二項動詞の前に置く。; 第二に所有格を表わし、名詞の所属形の前に置く。as² と un¹を参照。) 私は;私の。

êi eramesinne 私は、～で安心する。

êi esikari 私は、～を取り去る。

êi jajkosanke 私は、～を私の中から取り出す。

êi kik 私は、～を叩く。

êi karku ne kur 私の甥。

êi nukar 私は、～を見る。

êi ruska 私は、～に対し怒る。

êi oarkaje 私は、～（長いもの）を完全に壊す。

êi oanrajke 私は、～を完全に殺す。

êi osaŭsaŭa 私は、～（長いもの）の端を何度も揺する。

êi²-

[不定人称接辞] あるもの；自然の力（この接頭辞は使役接尾辞を持った動詞語基について、動詞語基の行為が、動作主には生命がないにもかかわらず、あたかも意志を持った行為をするかのように実現することを示す。）

san ～が、下る。

sana-san ～が、流れに沿って下る。

sana-san-ke ～が、～を流れに沿って下らせる。

êi-sana-san-ke 自然の力が、～を流れに沿って下らせる。すなわち、～が、あたかも生きているかのように、流れに沿って下る。

us ～が、～へくっつく。

o-us ～（長いもの）の下の端が、～にくっつく。すなわち、～（長いもの）が、それ自体の下の端を～にくっつける。

o-us-i ～が、～（長いもの）の下の端を、～にくっつける。

êi-o-us-i 自然の力が、～（長いもの）の下の端を、～にくっつける。すなわち、～（長いもの）が、あたかも生きているかのように広がり、その末端が、～に届く。

êis

[一項動詞] ～が泣く。

êi-sana-san-ke

[一項動詞]

(êi-参照。)

êi-o-us-i

[一項動詞]

(êi-参照。)

êop-

[kvk 語根]

(水が跳ねる音を表現した擬音語)

>copopatki

copop-atki

[一項動詞]

(copop- は cop-の反復形。)

~(光景)は、水が何度も跳ねている。

E

e¹

[人称接辞] おまえは。

>ehumna

e⁻²

[補充接頭辞]

~で。(この接頭辞は、節の中に新しい名詞句を導入する。たとえば mina 「~が、笑う」、mina as 「私が、笑う」； e-mina 「~¹が、~² に対し/について笑う。~字義通りには、~¹が、~²で快く感じて笑う」、neap çi e-mina 「私は、それに対し/について笑う」 e- は、~² (-neap)を、節へ補充する働きを持ち、そのため「補充接頭辞」と呼ばれる。

>ejajtemka

-e³

[使役接尾辞]

> kaje

-e⁴

[所属接尾辞]

(名詞の所属形を作る。たとえば、tek 「手」、tek-e 「~の(両)手」、rupnekur tek-e 「おとなの(両)手」。)

>haũe

ehumna

[文]

(原著者は、これを「おまえは、誰だ」と訳した。おそらく原形は、 e ek hum ne ja である。)

e-jaj-temka

[二項動詞]

～が、～で生き返る;～が、～で元気になる。

ek

[一項動詞]

～が、来る

>ehumna

ene

[指示副詞]

そのように;次のように。

ene itak i> itak

eramesinne

[二項動詞]

～が、～のため落ち着いている。

esikari

[二項動詞]

～が、～を取り去る。

esoro

[後置詞的副詞]

～(川)に沿って下流へ、または海へ。

pet esoro 川に沿って下流へ、または海へ。

etok

[位置名詞]

～(行くもの)の目標位置

>etoko

pet etok ta 川の源で。

pet etok un 川の源へ。

(pet etok(ta/un) 「川の源(で/へ)」と pet etoko (ūa) 「川の源の」は同じ意味をもつ。)

etoko

[位置名詞]

(etok 参照。)

H

haũ

[名詞] 声。

>haũe

ũen mina haũ > mina

ũen sinot haũ > sinot

haũ-e

[名詞]

「～の声」。(haũ「声」の所属形)

>haũean

haũe-an

[一項動詞]

～が、話す。(元の意味は「～の声がある」。)

ari haũean > ari

hemespa

(hemesu の複数形。)

hemesu

[一項動詞]

(複数形: hemespa) ～が、川をさかのぼる。

hosipi

[一項動詞]

(複数形: hosippa) ～が、帰る。

hosippa

(hosipi の複数形)

hum

[名詞; 形式名詞] (hum と、下の humi との意味の違いは不明。)

>ehumna

>humi

humi

[名詞; 形式名詞] 音、匂い、皮膚感覚、超感覚(気配)、すなわち視覚以外の感覚;それはこの接辞によって名詞化された節の内容と共におきる。

{ikkeũ noski êi kik} humi {腰のまん中を叩く}時にでる音。

humi as この接語の名詞節の内容と共におきる音、または、生じる(文字通りには立ちあがる)視覚以外の感覚。例えば、rupnekur ek humi as 「おとながやって来ることと共に、気配が生じる。」すなわち「私はおとながくる気配を感じる」言い替えれば、「おそらく、おとなが来るだろう。」

I

i¹

[
形
式
名
詞
]

ene itak i > itak

i⁻²

[不定人称接辞]

(目的格形: 主格形は la nominativa formo estas êi⁻²) あるものを。

> inu

-i³

[所属形名詞をつくる接尾辞]

>sinriçi

ike

[形式名詞]

(接続助詞の役割を果たすことがある。)

a ike ~のとき。

inu as a ike 私が聞いたとき。

ikkeũ

[名詞] 背中。

ikkeū kiror > kiror

ikkeū noski 腰とつながっている背骨の一部。

kosan ikkeū > kosan

imakakehe

[位置名詞] ~のかなた。

iūan pokna sir imakakehe 六つの地獄のかなた。

inkar

[一項目動詞]

~が、見ることをする。

inkar as a ūa 私が見ると(思いがけない光景が見えた)。

inkar as ko 私が見ると(思ったとおりの光景が見えた)。

i-nu

[一項目動詞]

~が、聞くことをする。

isoitak

[一項目動詞]

~が、物語る。

> ari isoitak

itak

[一項目動詞]

~が、話す。

ari itak > ari

ene itak i ~が、次のように話すこと (この名詞句は、引用文を導く働きを、持つ。)

iūan

[連体詞] 六つの~ ; 非常に多くの~。

iūan pokna sir 六つのまたは、非常に多くの地獄。

J

ja

[終助詞]

(疑問文を作る。たとえば、e oman 「おまえは行く」、e oman ja? 「おまえは行くか?」)

rajke 「～が～を殺す」

jaj-rajke 「～が自殺する」)

>ejajtemka

>jaje-

>jajko-

jaj-e-

[接頭辞群] 自分自身について

> jajejukar

jajejukar

[一項動詞]

～が、詩句の形で自分自身について物語る。

jaj-ko-

[接頭辞群]

自分自身から。

>jajkosanke

jajko-sanke

[二項動詞]

～が～を自分の体から出す。

jan

[終助詞]

(命令文で使われ、丁寧なニュアンスを加える。)

jukar

[一項動詞]

～が、詩句の形で物語る。

>jajejukar

K

kamuj

[名詞]

神。

kamuj ĉep > ĉep

kan

[律を整える接語]

(意味を持たず、詩句の音節の数を満たすために用いられる。)

kar

[二項動詞]

～が、～をする。

uraj kar > uraj

karku

[名詞；名詞の所属形]

甥；～の甥

ĉi karku ne kur 私の甥。（詩句形。字義どおりには、「私の甥である人」。これに相当する散文形は、kur karku。）

kasuj

[二項動詞]

～が、～を手伝う。

kaj

[一項動詞]

～が壊れる。

>kaje

kaj-e

[二項動詞]

～が、～を壊す。

>oarkaje

-ke

[使役接尾辞]

>rajke

>sanke

kik

[二項動詞]

～が、～をたたく。

uraj kik > uraj

uraj kik tuçi > tuçi

kir

[名詞] 骨髄。

>kiror

kir-or

[名詞]

筋力（元の意味は、「骨髄のある場所」である。アイヌは、筋力の源が骨髄にあると信じていたのだろう。）

mon tum kiror ikkeū kiror 全身の筋力（原著者は、この句を「全身の力、腰の力」と訳したが、文字どおりには、間違いなく「腕の力、背中の力」である。mon tum kiror でなく、この句全体が、全身の力を暗示しているのだろう。）

ko¹

[接続助詞]

（続く文の事柄が、前文と同時に起こることを意味する。）

hemespa ko ～が、上るとき。

inkar as ko 私が、見るとき（私は予想どおりの光景を見る）。

ko⁻²

[補充接頭辞]

～へ；～から。（補充接頭辞については e⁻²参照。）

>kosan

>kooterke

>koūen

>jajko-

ko-oterke

[三項動詞]

～が、～を～へ蹴る。

kor¹

[二項動詞]

～が、～を持つ。

pon rupnekur kor uraj kik tuçi 小男が持っている大槌。

kor²

[接続助詞]（同時性をあらわす。）

êis kor hosippa ～が、泣きながら帰っていく。

haŭ pepunitara kor hemespa 声が「ペッペペペッ」と響き、(声とともに) ～
が、登って行く。

ko-san

[二項動詞]

～が、～に下る/傾く。

kosan ikkeŭ -に傾いた背骨。

-kosanu

[自動詞語基をつくる接尾辞]

(擬音の kvk 語根について、音が瞬間的に起こることを表す。)

>tokkosanu

ko-ŭen

[二項動詞]

～が、～を嫌う。(文字どおりには、「～が～について悪くなる」)

kur

[名詞的助詞] 人。

ĉi karku ne kur > karku

>rupnekur

kusu

[接続助詞]

(前文の内容が、後文の内容の動機、理由あるいは原因であることをあらわ
す。) kutnisa kutun kutun

[繰り返し文句]

(意味は不明。)

M

mon

[名詞]

手、腕。

mon tum kiror >kiror

mosir

[名詞]

くに、世界。

pokna mosir > pokna

mina

[一項動詞]

～は笑う。

ŭen mina haŭ 大きな笑い声。

N

-n

[単数の自動詞語基をつくる接尾辞]

>san

-na

[自動詞語基をつくる接尾辞]

(場所を示す名詞に付き、存在の動詞語基を形成する。)

>pokna

>sana

ne

[二項動詞；連体詞；自動詞語基をつくる接尾辞]

～である～；その～。

ĉi karku ne kur > karku

>nea

>rupne

ne-a

[連体詞] 前に述べた～。

>neap

nea-p

[名詞]

その人、それ。

nesko

[名詞]

胡桃（くるみ）の木。

nesko ũakka 胡桃の木の樹皮の抽出物を含む水。アイヌは、そこから黒い染料を得る。

nesko uraj 胡桃の木の枝で作った川の柵。

nesko uraj ni 川の柵用の胡桃の木でできた杭。

ni

[名詞] 木；材木；木

製の棒。

uraj ni > uraj

-no

(ũa 参照)

>oroũano

>ũano

noski

[位置名詞]

～の真ん中。

ikkeũ noski > ikkeũ

nu

[二項動詞]

～が、～を聞く。

>inu

nukar

[二項動詞]

～が、～を見る。

nupki

[一項動詞]

～が泥だらけである。

nupki ũakka 濁った水。

0

o⁻¹

[部分接頭辞]

～(長いもの)の下端(末端)。

>ĉiousi

>osaŭsaŭa

o⁻²

[補充接尾辞]

～の方へ。(補充接尾辞については e⁻² 参照。)

>oterke

oanrajke

[二項動詞]

(oar rajke. アイヌ語の音韻規則より rr は nr に変化する。)

～が、～を完全に殺す。

oar-

[副詞的接頭辞]

完全に

>oanrajke

>oarkaje

oar-kaje

[二項動詞]

～が、～を完全に壊す。

Okikirmuj

[名詞]

主人公の名前。

pon Okikirmuj 小さな Okikirmuj; 若い Okikirmuj; 少年の Okikirmuj.

oman

[一項動詞]

(複数形: paje) ～が(山へ)行く。

or(o)

[位置名詞]

～があるところ。

>kiror

>oroŭano

oro-ŭa-no

[副詞]

それから。(朗唱の流れの中断を埋める働きを持つ。元の意味は、「そこから」。)

o-saŭsaŭa

[二項動詞]

～が、～の下端を何度も揺する。

o-terke

[二項動詞]

～が、～を踏みつける。

>kooterke

P

p

[名詞的助詞] 物；人。(例えば、pirka p 「良いもの」；ĉi rajke p 「私が殺した人」；un rajke p 「私を殺した人」。)

(指示名詞の構成要素として)

>neap

paje

(oman の複数形)

pep-

[kvk 語根]

(笑い声をあらわす擬音語)

>pepunitara

pep-unitara

[一項動詞]

～(笑い声)が、「ペプペプペプ」と鳴り響く。

pet

[名詞]

川。

pet esoro 川に沿って(山へ行く)。

pet etok(o) 川の水源地。

pirka

[一項動詞]

～が、良い。

pirka rera さわやかな風

pirka ũakka きれいな水

pok

[位置名詞]

～の下。

>pokna

pok-na

[一項動詞]

～が、下にある。(普通、連体詞的に使われる。)

pokna mosir 地下の世界。(=地獄)

pokna sir 地下の世界。(=地獄)

(pokna mosir と pokna sir は同じ意味。4音節からなる pokna mosir は単独で一詩句となるが、3音節の pokna sir はそうならない。これは iũan pokna sir 「六つの地獄」という詩句の中にあらわれる。)

pon

[一項動詞]

～が、小さい/若い。

pon okikirmuj > okikirmuj

pon rupnekur > rupnekur

punas

[二項動詞]

(元の形は puni as) ～が、～を上げて立つ。

punas punas ～が、～を何度も上げて立つ。

puni

[二項動詞]

～が、～を持ち上げる。

>punas

R

raj

[一項動詞] ～が死ぬ。

>rajke

raj-ke

[二項動詞]

～が、～を殺す。

>oanrajke

rera

[名詞] 風

pirka rera > pirka

rup-

[kvk 語根]

(大きいことをあらわす。)

>rupne

rup-ne

[一項動詞]

～が大きい。

>rupnekur

rupne-kur

[名詞]

大人。成年者。

pon rupnekur 小さな男。

ruska

[二項動詞]

～が、～（事柄）のせいで怒る。

S

sa

[名詞]

より下の流れ； 下方。

>san

>sana

sa-n

[一項動詞]

～が流れに沿って行く。； ～が下流へ行く。

>sa

>sana

>sanke

sa-na

[一項動詞]

～が流れの下の部分にある。

>ĉisanasanke

san-ke

[二項動詞]

～が、～を下に行かせる。； ～が、～を出す。

> ĉisanasanke

>jajkosanke

saŭ-

[kvk 語根]

(揺れる様子をあらわす。)

>osaŭsaŭa (saŭ の繰り返しは何度も揺れることを表現している。)

saŭ-a

[二項動詞]

～が、～を揺らす。

>osaŭsaŭa

sine

[連体詞]

ひとつの/ある～。

sine an to ta > to

sine pon rupnekur 一人の小男

sinot

[一項動詞] ～が遊ぶ。

ŭen sinot haŭ 大きな笑い声。

sinriĉi

[名詞]

(<sinrit-i アイヌ語の音韻規則により ti は ĉi に変わる。) ~の根元。

(sinrit の所属形。)

sinrit

[名詞]

根元。

>sinriĉi

sir

[名詞]

くに; 世界。

iŭan pokna sir > pokna

siri

[形式名詞] この節辞によって名詞化した文が描写する光景。vidaĵo, kiun propozicio substantivigita de ĉi tiu vorteto desegnas. (例えば、rupnekur ek siri ĉi

nukar 「おとながやって来る様子を私は見る。」すなわち「私は男がやってくるのを見る。」 humi と比較せよ。)

T

ta

[格助詞]

ĉe.

pet etok ta 川の源。

sine an to ta > to

terke

[一項動詞]

～が跳ねる。

>oterke

temka

[二項動詞]

～が、～を生き返らせる。

>ejajtemka

to

[名詞] 日。

sine an to ta ある日に。(詩句形であり、対応する散文形は sine to。)

tok-

[kvk 語根]

(叩く音をあらわす擬音語。)

>tokkosanu

tok-kosanu

[一項動詞]

～が、「トク」と一瞬音を立てる。

{ikkeũ noski êi kik humi} tokkosanu. {私が腰の真ん中を叩く音が}一瞬
「トク」と鳴る。

tuêi

[名詞]

大つち。

uraj kik tuêi > uraj

tum

[位置名詞] ～の中。

mon tum kiror > kiror

U

un¹

[人称接辞]

(目的格;二項動詞の前に置く。êi¹ 参照。)私を。

un kasuj ～が私を手伝う。

un nukar ～が私を見る。

un²

[格助詞]

～へ。

pet etok un 川の源へ。

-unitara

[自動詞語基をつくる接尾辞]

(kvk 語根に付き、語根があらわす音が続くことを意味する。)

> pepunitara

uraj

[名詞]

漁のための川の柵。

nesko uraj > nesko

nesko uraj ni > nesko

uraj kar ～が川の柵を作る。

uraj kik ～が川の柵を作るため川底に杭を打った。

uraj kik tuçi 川の柵の杭を叩く大つち。

uraj ni 川の柵の杭。

utar

[名詞的助詞]

(複数をあらわす)

kamuj êep utar 鮭(たち)

ŭ

ŭa¹

[接続助詞]

そして

a ŭa (この助詞は、前文の内容が起きた後に予想外の事が起きることをあらわす。)

ŭa²

[格助詞]

～-から離れて; -から分かれて; -から始めて。

pet etok ũa 川の源から

>ũano

ũa-no

[格助詞]

(始発点とそこから伸びる線をあらわす。)

ne uraj ni sinriçi ũano kaje 「～が、川の柵の杭を根元のところで壊した
(そして、根元の取れた杭を投げ捨てた。)」

>oroũano

ũakka

[名詞]

水。

nesko ũakka > nesko

nupki ũakka > nupki

pirka ũakka > pirka

ũen

[一項目動詞]

～が悪い。；～が悪くなる。；(単に付加的に) 大変な～。

>koũen

ũen mina haũ > mina

ũen sinot haũ > sinot